

案を作成した。

- ③ 相補学習のモデルをつくり、グループでの話し合いの方法をわからせて、自分たちの力で社会事象の追究ができるように計画した。(略)
- ④ 表現活動は、ねらいをはっきりさせて、具体的な内容の活動ができるように計画した。(略)

(4) 検証授業の実際

- ① 「田や畑ではたらく人たち」の実践
- ② 三つの指導の手だての確立

ア 体験学習

- (7) 農家見学と仕事の観察、農機具に触れ、試乗体験をした。
- (4) プラスチックの工具箱で米づくりをした。
- (ウ) 植木鉢でピーマン栽培をした。

イ 比較学習

- (7) 農家と自分の家の比較をした。(5月)
- (イ) 農家の稲苗や刈り取った稲と自分たちが育ててきた稲苗や稲束の比較をした。(7・9・10月)
- (ウ) 農家のピーマン苗をゆずり受けて来て、自分が育ててきたピーマン苗との比較をした。(7・9月)

ウ 相補学習

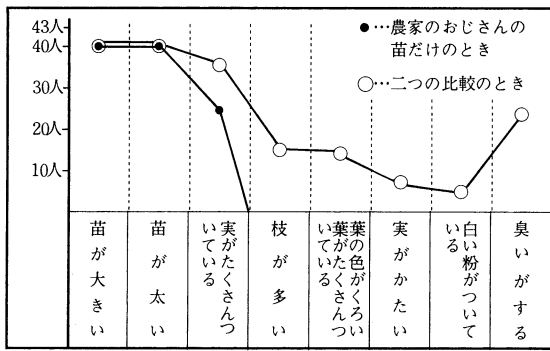
体験学習や比較学習で気づいた事や考えた事を一人一人が出し合い、農家の人たちの工夫や苦労、そして、自然条件の利用について、相補学習のモデルに従い進め深めた。

表2 指導過程(検証授業1)例一部

| 配時 | 学習活動・内容 | 資料 | 評価・分析視点 | 自らの力で事象のはたらきに気づく指導の手だて | | |
|----|---|----------------------|--|---|------|----------------|
| | | | | 体験学習 | 比較学習 | 相補学習 |
| 8' | 1. 5月以来育ててきたピーマンについての体験を出し合う。 ○工夫や苦労したこと ・水をやる ・害虫・消毒 ・支柱のせわ ○うれしかったこと ・はじめてなった | ○各自分のピーマン苗 ○収穫グラフ | —分析1— ○体験が学習に生かされているか ○学習する構えができたか ○野菜に対する考えを事前と比較し検証する | 体験学習 1. 大きく育てた事のため、各自の苗を机に上げて体験をさせる ・苦労や工夫を出せたか | 比較学習 | 相補学習 7人グループ |

- イ 分析2の考察
- ア 低学年の児童に一つの事象を教
- ④ 分析2 比較学習による事象のとらえ方(図1)
- ③ 授業の実際(略)
- ② 指導過程(検証授業1)
三つの指導の手だての効果を見るために検証項目を位置づけ作成した。(表2)

図1 比較学習は多面的に事象をとらえるか



師の説明だけでなく、とらえさせるのは、むずかしすぎる。
児童は、部分的、断片的なとらえ方をしがちなので、比較させることによって事象を具体的にとらえさせ、見方を養い認識を深める必要があることがわかった。
⑤ 授業の結果
低学年の児童にとつて、体験学習による、ことばや用語等のつまづきを排除したことは、学習内容の理解を容易にさせるばかりでなく、学習を生き生きとさせ、自らの力で積極的に追究することに役立つことがわかった。
比較の学習は、これまでの体験学習をさらに深化させながら社会

事象を追究させることができるのがわかった。
また、低学年でも適切な指導により、グループ学習をさせれば、それぞれが意見を出しながら相補し合うことがわかった。学習を具体的に示して、三つの指導の手だてをふむことは、効果があった。

五、研究の成果

三つの指導の手だてを位置づけた活動により学習内容をとらえる、気づく、深めるなどの手順をとおして思考のつまづきを排除し、児童自らが社会事象の意味を追究するようになってきた。

(1) 児童の変容

- ① 用語やことばによる学習のつまづきは、体験学習や比較学習によって徐々に排除されて、自らの力で社会事象のはたらきに気づく学習ができるようになってきている。
- ② 相補学習をとおして、自分たちで課題をとらえ、協力し助け合いながら、社会事象を追究しようとする姿勢がみられるようになってきた。

六、今後の課題

三つの指導の手だての効果をとらえる評価の方法が主観的になってしまった。
客観的な評価基準のもとで実践を積み重ねて、研究を確かなものにしていきたい。